

二七会とその人々

——一九二八～一九四四年——

望月詩史

はじめに

第一章 二七会の発足

第一節 発足の経緯

第二節 会員

第二章 二七会の活動

第一節 月例懇談会

第二節 一泊旅行

第三節 休止前後

おわりに

はじめに

本稿は、一九二八年に清沢洌と嶋中雄作（中央公論社長）が發起人となり、中央公論社を拠点として発足した「二七会」の活動状況を明らかにすることを目的としている。対象とするのは、会の発足から休止までの期間（一九二八年～一九四四年）である。

さて、会の中心的存在である馬場恒吾は、二七会には独特の精神が存在したと回想する。彼はそれを「二七会精神」と表現した上で、その特徴を次のように説明している。

筆を以って生活してゐるものの心持ちは、厭なら勝手にしろといふ言葉が何時でも胸にあると云ふ事だ。誰れに遠慮するでもなく、又誰れを支配せんとするでもなく、みんな自由に振舞つて、そして皆が怒らないといふ境地である。完全な自由独立、そしてみんな心持よく遊んでゐるといふ環境であつた。⁽²⁾

つまり、「二七会精神」とは、「自由」に特徴づけられる精神に他ならない。そうした「自由」が生み出される前提には、馬場が「この会に来る人々は何れも気の置けない、そして腹の底まで見せるといふ気心の人ばかりであつた」⁽³⁾というように、強い信頼関係が存在していた。

二七会は、毎月一回（原則として二十七日）の月例懇談会が開催された。また、春や秋には関東近郊に一泊旅行も行われた。月例懇談会では、主に政治や経済等の時事問題を議論したり、ゲストを招いたりした。とはいえ、毎回そういった内容ではなく、趣味の碁や将棋に興じることもあるれば、たわいもない会話を楽しんでいた。その点では、例えば中

中央公論社との関連で挙げると、「国民学術協会」⁽⁴⁾のように学術的に組織されたものとは性格を異にする。ちなみに、類似の会として、一九三七年頃に発足した「二六会」が存在する。小林二三の発意で発足した集まりであることから、「小林会」とも呼ばれる。⁽⁵⁾その顔触れは、二七会と重なる。室伏高信によれば、芦田均、馬場、嶋中、三宅晴暉が常連であり、伊藤正徳、清沢も時折参加していた。それ以外にも、長谷川如是閑、正宗白鳥、上司小剣、阿部真之助、谷川徹三、鈴木文史朗らが参加した。⁽⁶⁾二七会と比べると、二六会は評論家や新聞記者が中心であった。これは会の発起人である小林が、評論家らを招いて時局談を聞きたいという動機で会を発足させたことが関係している。⁽⁷⁾

二七会については、これまでも言及されてきたが、その中でも、清沢や馬場に関連する研究や評伝の中で取り上げられることが多かった。⁽⁸⁾その理由は、両者が二七会の中心人物であったことに加えて、清沢は『暗黒日記』を残し、馬場は「二七会の思ひ出」(『中央公論社七十年史』(中央公論社、一九五五年)所収)や『自伝点描』(東西文明社、一九五二年)等の中で言及しているからである。⁽⁹⁾それら以外に二七会を取り上げているものとして、二七会の世話人を務めた兩宮庸蔵(中央公論編集長)の『偲ぶ草―ジャーナリスト六十年』(中央公論社、一九八八年)が挙げられる。彼は、手元に残されていた当時の案内状や書簡などを交えて、発足の経緯や活動状況について詳述している。

これらにより、二七会の活動の一端は明らかにされてきた。しかし、その全容については、未だ不明な点が多く残されている。そこで本稿では、会員の日記⁽¹⁰⁾、当時の新聞・雑誌に発表された文章等を用いて検討する。そして、二七会の活動状況の全容解明に向けた一助としたい。

第一章 二七会の発足

第一節 発足の経緯

二七会の発足については、二つの説がある。第一に、吉野を中心とした評論家により始められた会を起源とするといふ正宗白鳥の説である。これによれば、嶋中が中央公論社の社長に就任した後、その会に参加したことから、「便宜上、島中が会の世話役となり、次第に中央公論社主催の会である如くみられるようになった」とされる¹¹⁾。第二に、清沢による発案という馬場の説である。以下で検討するように、正宗よりも馬場の説の方が、内容が具体的である。そもそも、正宗が会員となったのは一九三〇年であるため、二七会の発足時について、彼が事情を直接知っているとは考えにくい。

それでは、清沢はどういった経緯で、いかなる提案をしたのか。彼は、『中央公論』一九二八年一月号から十二月号までの毎号、海外時評欄「海外近事」を執筆していた¹²⁾。そして、その原稿料を受け取った際に、嶋中、馬場らを「偕楽園」(茅場町)¹⁴⁾に招待し、「文士や評論家を交へて、十人前後の会合を毎月開いたらどうだらう。会費は持ち寄り、世話役は中央公論社でやるとしたら、六ヶ敷い事はないだらう」と提案した¹⁵⁾。馬場と嶋中も、その提案に賛成した。清沢は、その場で案内状の送付リストを作成したようである。ただし、現時点では、具体的な人物名を特定できていない。初回の会場は「もみじ」(赤坂)であり、会費は五円だった¹⁶⁾。初めの数回は、もみじで開催されたものの、その後は「芳蘭亭」(築地)での開催が定着した。

清沢が会合を発案した理由について北岡伸一は、「日本で正規の高等教育を受けることが出来なかったことと密接に関係している」として、海外生活の長い清沢が国内の情報を入手する場を確保しなかったからではないかと推測している¹⁷⁾。一方、雨宮は、清沢が「実利的生活行動派として抜け目なく世に処したことの顕著な例」として、自らの利益のた

めに嶋中や中央公論を利用したと批判的に評価する。

では、二七会が発足したのは、具体的にいつなのだろうか。中央公論社及び中央公論新社の社史（『中央公論社七十年史』、『中央公論社の八十年』、『中央公論新社の二〇〇年』）は、いずれも「一九二九年八月二十七日」を採用してきた。そして、この日付が、二七会の発足日として定着している。例えば、橋川文三は、自らが編集・解説を行った清沢の『暗黒日記Ⅰ』（評論社、一九七〇年）の「注」で、二七会について、「昭和四年八月二十七日に発足した会合」¹⁹と説明している。それ以外にも、二七会に言及する多くの場合に、この日付が用いられる。しかし、この日付には、疑問点が存在する。第一に、この日の発足を裏付ける史料が存在しないことである。前記の社史に収録されている年表に記述されているのみであり、この日に発足したことを会員が証言しているのではない。第二に、発案者の清沢がこの時期に渡米していることである。北岡は、こうした事情を考慮した上で、一九二九年八月二十七日よりも前の時期、つまり、清沢の渡米前に発足した可能性を指摘している。²⁰この可能性を裏付ける史料が、複数存在する。第一に、吉野作造の日記である。一九二八年十月二十七日の日記には、「晴、夜二七会にゆく 会場芳蘭亭 始めて遇った人稲原勝治、石川六郎の両君 十時頃まで話して帰る」²¹と記している。また、翌月の二七会（十一月二十七日開催）にも出席していることが、「夜二十七日会出席 新顔では近江秋江、江木翼二氏の出席あり」という記述から明らかである。第二に、雨宮の回想である。正確な日付は明かではないものの、彼の手元に残されていた当時の案内葉書の消印が、「一九二九年三月二十一日付」だったことから、「会」は清沢がテキパキと運んで、すでに昭和三年の秋なかばには催されて²²いたと述べている。また、二七会の発足を記念した一泊旅行（日光）が、一九二八年の秋に実施されたという。

雨宮が言及した案内葉書は、²⁴現在、山梨県立文学館に所蔵されている。それによると、開催日時は三月二十七日（木曜日）午後六時開始、場所は芳蘭亭、会費は「四円五十銭ぐらい」と記載されている。また、前回（二月二十七日開催）

の出席者も併記されている(以下参照)。

吉野作造、長谷川如是閑、水野広徳、稲原勝治、島中雄作、千葉亀雄、馬場恒吾、鶴見祐輔、高橋亀吉、川原次吉郎、伊藤茂雄、秦豊吉、木佐木勝、小汀利得、雨宮庸蔵、清沢⁽²⁵⁾

この中で、その後の二七会に複数回出席しているのは、吉野、長谷川、水野、稲原、嶋中、千葉、馬場、高橋、川原、小汀、雨宮、清沢である。秦は、一九三〇年十一月の月例懇談会に出席している。鶴見、伊藤、木佐木の名前は、確認できない。

このように、従来、発足日とされてきた一九二九年八月二十七日よりも以前に、二七会が発足していたことが明らかとなった。少なくとも、一九二八年十月まで、その活動をさかのぼることができる。ただし、もみじを会場に開催された初回の日付を含めて、二七会の発足日を特定するに至らなかった。なお、「吉野作造年譜」(松尾尊允編)では、一九二八年十月二十七日の箇所に「吉野を中心とする『中央公論』執筆者の会が催され、二十七日会と名づけられる」と記述されているが、この根拠は不明である。

第二節 会 員

さて、二七会の会員及び入会時期については、関係者の証言に相違が見られる。特に、入会の正確な時期を特定できない場合がほとんどである。したがって、その前後関係は明らかではないものの、正宗は、一九三〇年に嶋中の誘いで会員となった⁽²⁷⁾ようである。そして、彼の回想によると、「私の加入したあとで、芦田均とか阿部真之助とか、今日の世

に活躍している傑物が、この席上に顔を見せるようになったと、私は記憶している⁽²⁸⁾と述べている。なお、回想に登場する阿部は、一九三五年十月から一九三六年四月の間に入会したとみられる⁽²⁹⁾。

一方、会員については、ほぼ特定されており、『嶋中雄作略年譜』(旧社員有志一同編、私家版、一九七一年一月)に掲載されている「二十七日会会員」が、最も会員を網羅(全二十七人)していると考えられる。

阿部真之助 安倍能成 芦田均 伊藤正徳 石橋湛山 稻原勝治 小汀利得 川原治吉郎 清沢洌 上司小剣 下村千秋 鈴木文史朗 杉山平助 谷川徹三 近松秋江 千葉亀雄 徳田秋声 長谷川如是閑 馬場恒吾 細田民樹 正宗白鳥 三木清 三宅晴輝⁽³⁰⁾ 水野広徳 柳沢健 蠟山政道 嶋中雄作⁽³⁰⁾

しかし、このリストは、以下の二点に注意しなければならない。第一に、名前が抜け落ちている人物がいること、第二に、全員が戦前期からの会員ではないことである。

まず、前者からみていくと、二七会の初期における中心人物である吉野の名が漏れている。従来、二七会について言及される場合に、吉野の存在に触れることが非常に少なく、回想等で登場するのは、雨宮と正宗のみである。なぜか馬場の回想には登場しない。吉野以外には、江木翼、佐々弘雄、高橋亀吉、新居格の名も落ちている⁽³¹⁾。江木は一九三二年九月に死去しているので、会員であったことの記憶が薄いのもかもしれない⁽³²⁾。だが、彼の出席率は高かった。一方、佐々、高橋、新居の場合、理由は定かではないが、名前が載っていない。なお、前記のリストに名前が載っている三木については、一九二九年より会員だったとされているが、それには疑問がある。彼は「中央公論社に対する私見」(『都新聞』一九三三年十一月十五・十六日付)において、「私は嶋中氏に直接お目にかかったことは一度しかない。何かの

会でお見掛けしたことも僅か二度にとどまるやうに記憶する⁽³⁴⁾と述べているからである。仮にこの文章を執筆した時点で二七会に入会していたとすれば、嶋中とほとんど面識がないという記述は不自然である。したがって、三木が仮に会員であるとしても、その入会は一九三三年十一月以降と考えられる。ただし、彼が月例懇談会や一泊旅行に参加していたことを裏付ける記録は見当たらない。

後者については、戦後新たに会員に追加された人物が含まれている。上記の会員リストは、一九七一年時点で作成されているので、その該当者を含んでいると考えられる。本稿では、戦後を対象に含めていないことから、該当者をあらかじめ除いておきたい。戦後に追加会員となった可能性があるのは、戦前・戦中の二七会に出席した記録が見当たらない、安倍、石橋、蠟山である⁽³⁵⁾。その中でも、石橋については、戦前から会員であったことを前提とする研究が多いため、検討の必要がある。

「石橋湛山年譜」では、一九二九年八月二十七日の箇所、「この日発足の「二七会」（清沢洌、島中雄作の発起）の会員となる⁽³⁶⁾」と記されている。また、上田美和は、石橋にとつての「戦時抵抗の場」の一つとして二七会を取り上げて、「石橋は発足当時のからの会員であった。石橋はここで芦田均、馬場恒吾、長谷川如是閑、小汀利得、徳田秋声、三宅晴輝らと交流を深めた⁽³⁷⁾」と指摘している。そして、その根拠として挙げているのが、前記の「年譜」と「年表・中央公論社の八十年」（『中央公論社の八十年』所収）である。後者の「年表」の一九二九年八月二十七日の箇所には、下記のように記述されている（なぜか正宗の名前が載っていない）。

嶋中雄作社長を中心に『中央公論』執筆家有志の会「二七会」誕生。毎月二十七日会合。会員・徳田秋声、馬場恒吾、近松秋江、長谷川如是閑、上司小剣、水野広徳、芦田均、伊藤正徳、柳沢健、鈴木文史朗、稲原勝治、小汀利

得、千葉亀雄、細田民樹、蠟山政道、下村千秋、清沢洌、杉山平助、三宅晴輝、安倍能成、谷川徹三、三木清、阿部真之助、川原次吉郎、石橋湛山、嶋中雄作。³⁸⁾

さらに、山本義彦は、清沢の「平和主義的通商路線」の主張について検討した際、それが石橋の植民地放棄論と並んで「極めて先進的な見地」と評価した上で、次のように指摘した。

当時、清沢は、すでに一九二九年八月以来、「二七会」を組織し（毎月二七日に会合する）、自由主義的文学者や評論家、ジャーナリストを集めており、そこには石橋も参加していたので、彼の議論は当然、清沢に大きく影響を与えたと考えるべきであろう。³⁹⁾

二七会を通じて、清沢は石橋の議論の影響を受けたというのである。

しかし、当事者による戦前・戦時期の二七会関連の回想や記録等には、石橋の名前がほとんど登場しない。⁴⁰⁾ その理由として考えられるのは、二つである。第一に、戦前期より会員として名を連ねていたがほとんど出席していない可能性がある。石橋は、一九二四年十二月に東洋経済新報主幹となり、一九二五年一月に東洋経済新報社代表取締役・専務取締役に就任（一九四一年二月に社長制新設に伴い代表取締役社長に就任）して以降、週刊誌『東洋経済新報』の社説や記事の執筆に加えて編集業務も多忙を極めた。また、一九三二年六月に経済倶楽部を発足し、自ら全国各地で講演活動を積極的に行った。さらに、一九三四年五月には英文雑誌『The Oriental Economist』を創刊しており、彼は、原則毎号の Review of month を執筆していた。こうした事情を鑑みると、会員ではあるものの出席率が極めて低かったと考え

することもできる。第二に、そもそも戦前期には会員に名を連ねていなかった可能性である。第一の理由に加えて、先に紹介した「年譜」や「年表」の記録を見る限り、これは考えにくい。だが、三宅晴暉の回想は、その可能性を示唆している。

石橋湛山は中央公論社の前社長嶋中雄作が肝入りでやっていた二七会のムムバーである。二七会というのは『中央公論』の執筆者の集まりである。戦前からあつて、月一回二十七日に集まるからその名があつた。前には東京に集まる外に、近県へ旅行などもして和やかな会であつた。戦後、死んだ人が相当にあつたので嶋中社長が補充を考え、石橋湛山などを入れた。二七会としては石橋湛山は戦後派に属する。(傍点引用者)⁽⁴⁸⁾

無論、三宅の記憶違いということもありえる。しかし、彼と石橋の関係性を考える時、その可能性は大幅に低下する。三宅は、一九二四年七月に東洋経済新報社に入社し、一九四〇年三月に退社するまで、同社の記者として石橋の下で働いていたからである。また、一九二八年十一月の結婚に際して、石橋夫妻が晩酌人を務めている。こうした両者の関係性を考えると、「二七会としては石橋湛山は戦後派に属する」という彼の回想が記憶違いである可能性は低いと考えられる。⁽⁴⁹⁾

前述のように、会員本人による戦前・戦時期の二七会に関する回想や記録に、石橋がほとんど登場しないことを考えると、戦後になって会員に追加されたという見方の方が、より説得的である。また、もし仮に戦前期より会員であつたとしても、ほとんど出席していないことが明らかなので、石橋が二七会を通じて、他の会員と親しい付き合いがあつたという指摘は不正確である。

なお、参考までに、戦後における石橋の二七会への出席について確認しておく、彼の日記に記録が初めて登場するのは、一九四七年一月二十七日である。同日の日記には、「嶋中雄作〔中央公論社社長〕氏の招に依り二十七日会に出席。夕食、会場芳蘭亭。久しぶりにて正宗白鳥等の諸氏に会す」と記されている。この日の石橋の参加が、少なくとも戦後初めてであったことは、「四時半芳蘭亭にて二七会。今日初めて、石橋湛山君来会。主人公の外に馬場、小汀、三宅、谷川、正宗、柳沢君来集。八時近くに引揚げて帰った」(傍点引用者)という芦田の日記によって裏付けられる。その後、石橋が二七会に参加したのは、以下の八回である。

一九四七年五月二十七日「午後八時より錦水の二十七日会に一寸顔出し。芦田氏等来会」⁽⁴⁷⁾

一九四八年七月二十七日「午後四時より築地錦水二七会に出席、鈴木文史朗氏の渡米、伊藤正徳氏の結婚祝のため、芦田首相もおくれて出席」⁽⁴⁸⁾

一九四八年十一月二十七日「夜、築地錦水における二七会に出席」⁽⁴⁹⁾

一九四九年十二月二十七日「夜、築地錦水での二七会に出席」⁽⁵⁰⁾

一九五〇年四月二十七日「五時より築地錦水にて二七会」⁽⁵¹⁾

一九五〇年十二月十八日「五時半より二七会、場所は錦水。芦田、馬場等諸氏」⁽⁵²⁾

一九五二年十二月二十七日「七時ごろより二七会(中央公論)に出席、錦水。芦田、馬場等諸氏出席、にぎやかなり。芦田曰く、大いに自重せよと」⁽⁵³⁾

一九五四年十二月二十七日「午後五時芳蘭亭にて二七会」⁽⁵⁴⁾

第二章 二七会の活動

本章では、二七会の活動に焦点を当てる。開催日時や出席者（参加者）等については、巻末の資料を参照されたい。

第一節 月例懇談会

二七会の主な活動は、原則として毎月二十七日に開催された月例懇談会と年二回の一泊旅行である⁽⁵⁵⁾。月例懇談会の会場は、主に中華料理店の芳蘭亭と偕楽園である。一九三二年五月の月例懇談会は、「浜のや」で開催されたが、ここも中華料理店だった。会場の多くが中華料理店だったのは、関東大震災後の東京では、中華料理が大発展を遂げた時期だったことが関係していると推測される。会費は、一九二九年三月の時点で四円五十銭⁽⁵⁸⁾、一九三五年十月の時点で四円、馬場の回想では五円だった⁽⁶⁰⁾。正宗の記憶では、後に会費が免除となり、中央公論社（実質的には嶋中）が全額を負担したようである⁽⁶¹⁾。なお、嶋中以外にも、編集上の利点を理由に、中央公論編集部から数名が参加した⁽⁶²⁾。

例会の案内と出欠確認は、次の二つの葉書が封筒に同封されて会員に送付されたと考えられる。第一に、日時・場所・会費等が記載された案内葉書、第二に、出欠用返信葉書である。いずれも、表記や形式を変更している可能性が否定できないものの、参考までに、山梨県立文学館に所蔵されている一九三八年十一月の返信葉書を紹介したい⁽⁶³⁾。宛名面には、「東京駅前丸ビル五階／中央公論社内／二七会世話人行」と記載されており、到着分の葉書には受付印（年月日）が押されている。裏面は空白であり、各自が「出欠」と「氏名」を自筆で記している。出席の場合は「出席」とのみ表記する場合はほとんどであり、欠席の場合は、一言添えられている。

月例懇談会は毎回、幹事役が決められていた。そして、主に会員による話題提供があり、その後、議論が自由に交わ

された。内容が判明しているのは、以下の通り。

一九二九年十一月 赤松克麿の国家社会主義が話題となる。⁽⁶⁴⁾

一九三五年九月 芦田による満洲視察の報告。

一九三六年二月 二・二六事件が話題となる。

一九三八年七月 嶋中より近松への援助依頼。翌日、会員が中央公論社に集合し、見舞金を贈る件について具体的な相談。近松も招かれる。⁽⁶⁵⁾

一九四〇年一月 「浅間丸」事件が話題となる。

一九四〇年七月 馬場による「新体制」に関する報告。

一九四一年一月 日米関係が話題となる。

一九四一年二月 (日本、日米関係の) 将来について語る。

一九四一年七月 第二次近衛内閣総辞職(松岡洋右外相の更迭)が話題となる。

一九四一年十一月 日米交渉、ゾルゲ事件が話題となる。

一九四一年十二月 対米戦争が話題となる。

一九四二年十一月 政治状況、国際情勢が話題となる。

また、非会員を招くこともあった。松本丞治(一九三四年五月)、後藤新平(一九三四年七月)、鹿島(守之助と推測される)(一九三五年四月)、松岡洋右(一九三九年一月)が招かれている。⁽⁶⁶⁾さらに、会員が海外に出掛ける際には送別

会、帰国時には帰朝歓迎会が催された。⁽⁶⁷⁾

それでは、会の雰囲気はどういったものだったのだろうか。それは、吉野の死去を前後に変化が見られるようである。吉野が参加していた頃は、彼が中心となつて、政治、外交について活発な議論が交わされていた。その模様を千葉が書き残している。

合理性の前には、どんなものにも頭を下げまいといふ、強靱な闘争の意志が僕等の集まりである二十七日会などで、半分はせつない咳に妨げられ、片手を口に当てながら、苦しい息で語りつゞける君の意見の中にさへ、それははっきりと認められるのだった。どんな政治、外交問題を持ち出しても、君は明快な判断を即座に下す、僕の二十七日会に出る楽しみは、君の政治観を聞き得るためも一つはあった。⁽⁶⁸⁾

また、嶋中も、吉野が出席すると否とでは、会の雰囲気が異なると述べて、以下のように述懐している。

吾々のグループで作つてゐる二七会には、先生は努めて出席された。近頃は殆どその席上でお目にかゝる位のこと
で、それも最近はさうさいく先生のお顔を見ることはできなかつた。／＼それを私達は非常に寂しいことに思つて
ゐた。先生が出席されると出席されないとでは会の気分も余程違つて来た。(中略)もう永久にわれらの二七会へ
も顔を出しては下さらないのである。そればかりではなく、私達の質疑には、どんなことでも丁寧親切に説明して
下さつた先生はもう此世に無いのである。⁽⁶⁹⁾〔は原文における改行を指す。以下、特に断りのない限り同じ〕

こうして、初期の二七会は、吉野を中心に政治や外交に関する議論が交わされていた。時には、中国の状況や自由民権運動も話題となった。⁽⁷⁰⁾

吉野が会の中心となった背景には、この時期における彼と中央公論社の関係の変化が少なからず影響している。⁽⁷¹⁾ 嶋中が同社社長に就任した一九二八年八月に、吉野は中央公論顧問格となるが、これはある処置に対する「配慮」だった。つまり、中央公論社の立て直しを図るために、中央公論の編集に大きな改革が試みられたことであり、いわば「編集左翼」（雨宮庸蔵）による誌面の刷新である。これは売り上げが伸びていた『改造』への対抗策でもあった。その一つが、吉野の署名論説の廃止である。一九二九年一月、一九一五年十月から続けていた社会時評欄が廃止された。⁽⁷²⁾ ただし、無署名の巻頭言は担当し、必要に応じて署名原稿が依頼されることになった。⁽⁷³⁾ とはいえ、この巻頭言について吉野は、「十月号は記念号ですから此際を機として面目一新をはかる意味で巻頭言を人を代えて書かして見たら如何かと思います。私自身いやになったと云うのではありませんが雑誌の為に少しでもいい方にと考えての事です」と、若手への交代を示唆する旨の書簡を雨宮に送っている。

こうした中央公論社の改革により、吉野は執筆の場と収入を減らすこととなった。したがって、二七会は期せずして、「博士を中心にすることに於いて敬愛と慰安の誠をつくした」⁽⁷⁵⁾ 場となったのである。なお、吉野が二七会を大切な場としていたことは、出席率の高さが示している。また、一九三三年八月二七日に、清沢の米国からの帰朝歓迎会が二七会で催された際、病身を押し参加した。清沢は当日の吉野について、「藁のように痩せて居られた」と述懐している。⁽⁷⁶⁾

だが、吉野の死去を境に二七会に変化が生じた。その前後に、文学者を会員に追加したことが関係している。近松が、「随筆 銀座で会ふ人々【上】」（『読売新聞』一九三四年十一月二十一日付）の中で、「この一、二年來徳田、正宗、上司などの老作家もやって来る、細田民樹、下村千秋君も来る」と述べていることから判断して、一九三一、三三年頃に

文学者を会員に追加したと考えられる。その結果、二七会の雰囲気やあり方に変化が生まれた。その変化を正宗が述べている。

吉野作造は早く物故したので、私はその卓抜なる民主説を直接耳にする機会を失ったのであったが、あの時代に、吉野をはじめ馬場恒吾、稲原勝治、小汀利得、清沢洌、佐々弘雄などが、ささやかな中華料理店などに集まって、それぞれの民主主義的、自由主義的見解によって、眼前の政治を論じ世相を批判していた光景は、さぞ精彩を放っていたのであろうと推測される。²⁸⁾

少なくとも、彼が参加した頃の二七会では、「眼前の政治を論じ世相を批判していた光景」が、頻繁に見られなかったということなのだろう。前述のように、吉野亡き後の二七会でも、政治を中心とする時事問題について議論が交わされていた。その一方で、自由な「勝手なことをしゃべり合う目的のない会」²⁹⁾の性格も併せ持っていたことから、彼はこのような印象を抱いたと推測される。だが、この緩やかさが、一九四四年まで二七会を継続させる一つの要因となったことも事実である。

ところで、正宗は戦後、二七会について回顧した際、そこで交わされていた議論を「空論」と評した。

戦争前から戦争中、戦後にもわたって、この激しい時勢の変遷につれての彼らの感想である。どれもみな、面白いといえば面白い。人によって批判ぶりが異なるとはいえ、とにかく、吉野作造を元祖とするこの会だから、軍人の横暴を憤ったり、政治家の無気力を歎じたり、現状打開の名案もおりおり出ているようであった。しかし、いくら

陰で何を云ったって何にもならぬのではないかと、私には推想された。そんなことをいって自分の鬱憤を晴らすだけではないか、と私には思われたが、実際の日本の現実にとつては、彼ら知者の名論も、畢竟は空論であつたのではないか。⁽⁸⁰⁾

一見すると、二七会に対する彼の評価は高くない。それでも、彼は二七会に参加した。その理由を、「また空論を戦わすか」と、せめてもの空論の妙味を味わうつもりで、その会に出ていたことを私は人生の一事実として回顧するのである」と語っている。「空論の妙味を味わう」ことを目的に参加していたという点に注目すると、別の見方ができる。つまり、彼は、空論にも意味がある、と考えていたのである。「机上の空論」(『読売新聞』一九三八年八月六日付(夕刊)「二日二題」)と題された文章の中に、彼がそのように考えた理由を紐解く手がかりが含まれている。この中で正宗は、小林二三の「芝居ざんげ」(『中央公論』一九三八年九月号)を取り上げる。小林が世の中の演劇改革論を次々と取り入れたものの失敗に終わり、こうした改革論は所詮机上の空論に過ぎなかつたと反省しているのだが、正宗は、机上の空論は決して馬鹿にできないという。そして、「世界の歴史を通観すると、人類は、空論家の所説によつて動いてゐるやうでもある。(中略)空論をすべて排斥してゐたら、世の中の進歩はすべて杜絶されるのだ」と説いた。⁽⁸¹⁾確かに、彼にとつて二七会で練り広げられる議論は、現実の政治現象を動かすほどの力を持つものではなく、空論に思えた。だが、長い目で見れば、世の中を動かす原動力になっていることも否定できないと考えたのである。だからこそ、彼は二七会に参加し続けたのだつた。

本節の最後に、二七会の集合写真について言及しておきたい。『暗黒日記』(評論社版)や『中央公論の八十年』等には、二七会の開催時に中央公論社で撮影されたとみられる集合写真が掲載されている。写っているのは、嶋中、徳田、

千葉、馬場、清沢、稲原、小汀、長谷川、上司、杉山、芦田、柳沢、水野である。具体的な日付や場所は記されていないが、『嶋中雄作略年譜』では、「昭和八年八月二十七日 丸ビル五階中央公論社にて」とキャプションが付いている。しかし、この日付は以下の二つの理由により誤りである。第一に、芦田の日記によると二十六日（土曜日）に偕楽園で二七会が開催されており、その出席者と写真に写るメンバーが一致している。第二に、写真に写っている日めぐりカレンダーが「26」である⁽⁸³⁾。以上から、撮影された正確な日付は、二十七日ではなく二十六日である。

第二節 一泊旅行

一泊旅行は、春と秋の二回行われた。馬場の回想によると、行先は、伊豆、箱根、修善寺、那須、草津、日光であった。それら以外の場所にも行ったようだが⁽⁸⁴⁾、現時点で確認できているのは、次の九回である。

- ① 一九二八年・秋 日光
- ② 一九三四年六月二十三・二十四日 箱根
- ③ 一九三四年十一月十七・十八日 那須
- ④ 一九三五年五月二十五・二十六日 修善寺
- ⑤ 一九三五年十一月十七・十八日 川原湯
- ⑥ 一九三六年五月二十三日 伊豆今井浜
- ⑦ 一九三六年・秋 草津・軽井沢
- ⑧ 一九三七年・春 日光

⑨ 一九四〇年三月二十七・二十八日 熱海

旅行を準備したのは、嶋中と佐藤観次郎（中央公論編集長）であつた。⁽⁸⁵⁾ 月例懇談会と同様に、毎回、幹事役が決められていたようである。ちなみに、正宗は大勢では夜寝られないことを理由に参加しなかつた。⁽⁸⁶⁾ 旅行先までの往復は、原則として、一同で行動した。現地では、全員で景勝地や寺院を見学したり、自由行動の時間も設けられたりしていた。宿泊先では、度々宿の主人から色紙や短冊を渡されて、一筆頼まれたることもあつた。また、欠席者に旅行先から絵葉書を送ることが、いつしか恒例となつていた。以下では、それぞれの旅行の模様を紹介しておきたい。

① 日光

二七会の発足を記念して、一九二八年の秋に実施された。判明している参加者は、馬場、長谷川、杉山、雨宮である。だが、この旅行については、雨宮の回想に登場するものの、他に記録が残されていないため、旅行の日は不明である。ただし、長谷川は、この年の十月半ばから十一月下旬まで、南満州鉄道会社の招待で中国に赴いている。⁽⁸⁷⁾ したがって、九月から十月上旬、あるいは十一月下旬と推定される。ちなみに、雨宮は、旅行中の馬場とのやり取りから、長谷川が後に「戦争絶滅受合法案」（『我等』一九二九年一月号）として発表する法案の着想を得たエピソードを紹介している。⁽⁸⁸⁾

② 箱根

一九三四年六月二十三・二十四日に実施された。参加者は、上司、芦田、清沢、細田、杉山、嶋中、佐藤、千葉、徳田、近松、下村、川原、長谷川、馬場、小汀、佐々、高橋である。午後五時に出発し、八時に宿泊先の俵石閣に到着し

た。⁸⁹ 旅行の模様を上司が書き記している。

このごろ滅多に旅行をしない私も、最近に旅行といふほどではないが、最も敬愛する二七会の諸子と箱根に一遊したのは愉快であった。私はおくれて行ったが、同行十七人、仙石原の高原を横切り、湖尻から湖水を渡って、十国峠を越え、熱海に出た道中は、近來にならいよい遊行であった。自動車の中で少女の口を迸る名所古蹟説明の雄弁、教へ込まれたま、らしい機智に、芦田均、清澤洸、細田民樹、杉山平助等の剛の者が、一斉に拍手喝采する姿は、容易に見られぬ無邪気な光景であった。島中公社長、佐藤同記者、千葉、徳田、近松、下村、河原、長谷川、馬場、小汀、佐々、高橋等諸氏の一隊が、湯河原で二つに別れた。⁹⁰

長谷川は「天然」を愛する道」（『読売新聞』一九三四年六月二十八日付（夕刊）「二日一題」）と題する文章を旅行直後に発表しているが、その内容は、この旅行で目にした箱根の風景から着想を得たと考えられる。「日本人の「天然」の愛し方は一寸違つてゐる」という言葉に示されるように、あちらこちらに「国立公園」の看板を立てて自然の保護を謳っているにもかかわらず、人の手が届く範囲は、自然を汚す風景を目の当たりにしたからである。

③那須

一九三四年十一月十七・十八日に実施された。判明している参加者は、近松、下村、細田、水野、馬場、清沢である。宿泊先では、宿の主人から色紙や短冊を渡されて、下村が絵を書き、細田は和歌を作った。⁹¹ 近松は、旅行中の印象について、「一泊旅行などといへば、すぐエロ気分横溢といふところであるが、諸君は、流石に、衆に先んじて天下を憂へ

る紳士であるから、エロ気分などは、オクビにも出さないのは、尊敬に価すると、私は、独りひそかに思ったことであつた⁽⁹²⁾と記している。

④修善寺

一九三五年五月二十五二十六日に実施された。宿泊先は、旅館新井である。参加者は、芦田、長谷川、上司、細田、清沢、下村、馬場、小汀、徳田、杉山、千葉、水野、川原、近松、嶋中、佐藤である。芦田は、翌朝に単独で帰京した。なお、幹事役の柳沢が欠席したため、旅館新井の主人と井上彰（東静日日新聞社長）が案内役として同行した。

二日目に一同は、昼食を取るために修禅寺を訪れた。長谷川は、同寺の本堂に飾られている副島種臣による額が印象的だつたようである⁽⁹³⁾。ここでは、まず、僧より合掌礼拝の型を一通り教えられ、禅堂の入り口で、合掌、三拝の礼をとつた。上司は、「平素口のわるい面々が、沈黙合掌して、殊勝気に控へてゐるのを見て、くすくす笑ひ出したものがあり、若い僧に叱られてゐた⁽⁹⁴⁾」とその時の模様を書き記している。ちなみに、彼は長谷川の合掌姿が特に印象的であつたようであり、「希臘の彫像を見るやうであつた」と表現している⁽⁹⁵⁾。禅堂の中で供されたのは、御飯（白飯の割合が高い）、一汁、油揚げ、芋、椎茸の煮物、青菜のお浸しだつた⁽⁹⁶⁾。お代りもできたが、口にする前に必ず唱えことをしなければならなかつた。

その後、一行は静浦へ行き、沼津市長の招宴を受けた。馬場によると、この時に水野が泥酔し、清沢や近松に強引に酒を勧める等の失態を犯した。酔いの醒めた水野は、「今後は旅行に参加しない」と言い張り、皆が「そこまでする必要はない」と慌てて止めたというエピソードが残されている⁽⁹⁷⁾。

⑤川原湯

一九三五年十一月十七・十八日に実施された。「関東の耶馬溪」と称される吾妻溪谷等を見学した。判明している参加者は、徳田、馬場、小汀、清沢、上司、杉山である。

この旅行は、馬場にとって特に思い出深いものだった。彼は、若山牧水『牧水紀行文集』（改造文庫、一九三三年）を読んで以来、牧水の紀行文をこよなく愛していたからである。そして、紀行文に登場する場所を訪れたいという気持ちを強く抱くようになった。幸いにも、二七会の仲間とその一つに旅行する機会に恵まれた。この旅行で訪れた川原湯は、牧水の「吾妻の溪より六里ヶ原へ」や「溪はたの温泉」にも登場する。宿泊した敬業館は、かつて若山も宿泊した縁のある宿だった。

川原湯は成程良い所であった。吾妻川の溪谷の南側の斜面にあつて、対岸の川原畑のまばらな家を見おろす。その向うに相当に高い山脈が紅葉している。それが一帯に秋の日をうけて、何とも云えないよい景色を見せる。この溪谷の上手の方を見ると、十一月というに雪を頂いた山が遠く見える。中外の小汀君があれば白根山だと云った。川原湯へ来る途では浅間山が正面に見えたが、こゝでは見えぬらしい。⁹⁸⁾

馬場は、この旅行を欠席した長谷川宛の絵葉書に、「ふりかゝる落葉に打たれ川原湯の、溪間を行けば旅は悲しも」と詠んだ和歌を書いた。だが、すかさず杉山が「何故悲しいか、理由が分らない。それに、この歌は川原湯でなくて、何処でも通用する」と批評した。馬場は何も悲しいことはなかったが、「私には牧水が旅行した時の光景が頭の中にあつたから、『旅は悲しも』と云つたのであつた」と理由を語っている。⁹⁹⁾

⑥伊豆今井浜

一九三六年五月二十三日に実施された。旅行の詳しい内容は、今井浜に宿泊したこと以外、明らかではない。⁽¹⁰⁾ 判明している参加者は、近松、稲原である。芦田も参加予定だったが、議会開会中であり、不参加となった。

⑦草津・軽井沢

一九三六年の秋に実施された。判明している参加者は、馬場、上司、長谷川である。水野も参加予定だったが、上野発の列車に乗り遅れて不参加となった。彼は「汽車に遅れて一人で屈托しつゝ、飲んでいるという意味の和歌」を記した電報を宿先に送った。⁽¹¹⁾ この時も、宿屋の主人から色紙を渡されたので、各人が和歌を作った。上司は、ファッショの歌として、「蠟燭もたまにはよしとつけてみれば、幽霊が出ると子等の騒げる」、自由主義の歌として、「霜柱、たき火をのせて崩れざる」を詠んだ。長谷川は、「人の子に病はあれど、こゝにして、癒えぬ病ぞ人の子の病ひ」と詠った。馬場は、「人の来ぬ山に住まへば森の木々、みな自らのわびしさ語る」と詠んだが、長谷川に「センチメンタル」と評されたので、もう一つ「こけというは、馬鹿につけたる名前也、こけこそ人はかなしかりけり」と詠った。⁽¹²⁾

この旅行も、馬場にとって思い出深い旅の一つとなった。訪れた土地が、やはり若山の紀行文に登場する場所だったからである。帰路に立寄った六里ヶ原は、彼の紀行文にも登場する場所ということもあり、馬場にとっては感慨深い旅行となった。

⑧日 光

一九三七年の春に実施された。判明している参加者は、馬場、清沢、長谷川である。馬場と清沢は、湯ノ湖で鱒釣り

を行ったが、一匹も釣れなかった。そこで、馬場は長谷川を誘い金精峠に向つたものの、峠には到達せず、途中で引き返した。だが、馬場は「青葉を通して来る陽に照らされながら静かな山道を登る心持はよかつた」と満足したようである。⁽¹⁸⁾

⑨熱海

一九四〇年三月二十七・二十八日に実施された。この旅行は、熱海の山王ホテルで静養していた嶋中に見舞いを目的としていたので、これまでの旅行とは性格を異にする。嶋中は、前年十二月より風邪をこじらせており、一月に入院し、一カ月後に退院してから同ホテルに滞在していた。参加者は、徳田、正宗、伊藤、川原、長谷川、清沢、水野、馬場、細田、下村、上司、阿部、杉山である。⁽¹⁹⁾

第三節 休止前後

これまで、二七会の活動状況について概観してきた。月例懇談会や一泊旅行は、ごくありふれた内容であり、特別なことは見当たらない。だが、会員はこの会を非常に好んだ。その理由として度々指摘されるのが、「言論の自由」の存在である。⁽²⁰⁾つまり、時局に対して自由にモノが言える空間が、そこに存在していたということである。そして、その空間には、会員の態度や振る舞いを通して醸し出される独特な雰囲気や気風が漂っていた。ここで筆者が想起するのは、ラスキが『近代国家における自由』の中で述べている「自由の本質」である。彼はそれを、「人々の間にある無形の雰囲気、の表われ」とし、「法律を越えた社会の気風の問題」⁽²¹⁾（傍点引用者）とした。

こうした雰囲気や気風が、二七会に生み出された要因の一つとして、馬場の言葉を借りれば、「自己滅却」が習慣化

されていたことが挙げられる。⁽¹⁰⁾つまり、自己を客観的に捉えることができるため、自己への執着が弱い。したがって、他者への押し付けがましい態度は見られないのである。

兎に角この連中には、自分のエラサを人に認めさせようと自分を前におし出そうとかいうことは絶対にしない。それが意識的にそうなるのではなくして、かれらは生れつきこう自己滅却を理想とするように出来てゐるらしい。尤も書くものは別だ、だからこれらの友人に会っていると、何かで衝突しはせぬかという心配は少しもない。お互に勝手なことをいって誰も腹を立てない。こうした人々と逢うことには何物にも代えられぬ楽しみがある。⁽¹⁰⁾(傍点引用者)

もちろん、馬場が「書くものは別だ」と断るように、あくまで筆を生業としてゐる以上、文章の上では、自己を積極的に表現することは必要である。しかし、そこから離れた個人の付き合いには、そうした態度を持ち込まないという線引きが習慣化されている。だからこそ、「話をしていても八方開け放し、融通無碍、風の吹き通しの室にいる如く心持ちがよい⁽¹¹⁾」と感ぜられるのである。そして、それが二七会の居心地の良さを生み出していたのであった。

しかしながら、会員がこよなく愛する二七会の活動は、戦時中に休止へと追い込まれる。一九四一年末までは、ほぼ毎月月例懇談会が開催されていたが、翌年以降、開催回数が大幅に減少する。その原因として、第一に、対米戦争の開戦による影響、第二に、内閣情報局が一九四一年二月に主要な出版社に対して内示した「執筆禁止者リスト」の存在が挙げられる。リストには、横田喜三郎や田中耕太郎らと並んで、二七会のメンバーである馬場、清沢、水野の名も含まれていた。⁽¹¹⁾こうした事情に配慮して、「しまい頃には、集まるのを遠慮したね⁽¹²⁾」と、後年に伊藤が語っている。

それでは、二七会の最後の開催はいつだったのだろうか。現時点で判明しているのは、一九四四年一月二十七日である。清沢によれば、この日は一九四三年十一月に亡くなった徳田の追悼会であった。彼の日記には、「久し振りに「廿七日会」あり。徳田秋声追悼会なり。今夜は偕楽園中々のご馳走あり。全部の会員集まる」と記されている。これ以降、彼の日記には、二七会に関する記述は登場しない。

この時期を境に二七会が開催されなくなった理由として考えられるのは、次の二つである。第一に、中央公論社延いでは鳴中をめぐる事情である。具体的には、一九四四年一月に「横浜事件」の被疑者として中央公論社社員五名が連行され、また、『婦人公論』の廃刊が決定したことである（最終号は同年三月終刊号）。さらに、伊藤『軍縮読本』、佐々『大衆政治読本』、馬場『議會政治論』、『政界人物風景』、『現代人物評論』、清沢『現代世界通信』等、二七会会員の著書が発禁処分を受けたことも無視できない¹¹¹。最終的に、中央公論社は、改造社と共に、一九四四年七月に陸軍情報局より「営業方針において戦時下国民の思想善導上許しがたい事実がある」ことを理由として自発的廃業を勧告され、同月末に解散した。

第二に、一九四四年二月二十五日に閣議決定された「決戦非常措置要綱」である。これは「決戦の現段階に即応し国民即戦士の覚悟に徹し、国を挙げて精進刻苦、その総力を直接戦力増強の一点に集中し、当面の各緊要施策の急速徹底を図る」ことを目的に講じられた「非常措置」である。「学徒動員体制ノ徹底」、「国民勤労体制ノ刷新」、「防空体制ノ強化」等を含む、具体的決戦実行目標十五項目からなる。そして、この中に「七、高級享楽ノ停止」として、「高級料理店待合ハ之ヲ休業セシメ、又高級興行歓楽場等ハ一時之ヲ閉鎖シ其ノ施設ハ必要ニ応ジ之ヲ他ニ利用スルト共ニ其ノ関係者ハ時局ニ即応シテ之ガ活用ヲ図ル」¹¹²ことが定められた。さらに、二月二十九日の閣議では、「高級享楽停止に關する具体策要綱」（全十二項目）が決定され、三月五日から一年間（後に延長）、全国一斉に実施されることとなった¹¹³。

その目的は、「戦力増強の第一線に挺身する国民一般大衆の娯楽機関は確保し高級享樂の追放の半面において大衆食堂、移動演劇、映画等の普及徹底をはかること」とされた。ただし、高級か否かの判断は、「決戦下の社会通念に従い各地方庁で実情に即して決定する」ものとされ、地域関係、業態の内容、規模の大小、華美の有無を基準に決定された。¹¹⁷⁾ここでは、高級料理店に関する項目を見ておきたい。

一、高級料理店（料理店として許可せるもの及飲食店として許可せるもその実質が料理店として許可せるものに相当するもの）は之を休業せしむ／飲食店として許可せるもの（その実質が料理店として許可せるものに相当せるものは除く）は之が営業を継続せしむ／休業せしめたる料理店中その内容享樂的ならざるものにして適當なるもの¹¹⁸⁾に付ては必要に応じ改めて飲食店として営業を認むるものとす

このように、原則として、料理店は休業、飲食店は営業の継続が認められた。だが、前者も享樂的な内容でないと認められれば、飲食店として営業が認められるとした。最終的に休業や閉鎖となった料理店は、「帝国ホテル、精養軒、宝亭、雅叙園、星ヶ丘茶寮、嵯峨野、錦水、竹葉、今半等高級料亭、料理店、全部約八百五十」軒である。¹¹⁹⁾そして、ここには月例懇談会の会場として頻繁に利用していた偕楽園も含まれていた。なお、営業が認められたのは、前述のように、飲食店の形態であり、なお、かつ料理の最高価格が、昼食一円以下、夕食二円以下（税別）とする場合に限られた。これらの措置は、三月五日から全国一斉に実施することが決定していたため、二月の開催に直接影響があったとは考えられないが、開催を裏付ける記録は残されていない。ちなみに、二六会も同時期に休止となった。ただし二七会とは異なり、最後の会合は、二月二六日に開催された。¹²⁰⁾

おわりに

本稿では、一九二八年に中央公論社を拠点に発足した二七会について検討した。その結果、月例懇談会や一泊旅行の内容が明らかとなった。しかし、依然として不明な点も存する。特に、発足時期の正確な日付は、今後の課題として残されている。前述のように、清沢が海外時評欄「海外近事」の原稿料を受け取った際に、二七会の発案をした食事が開催されたことから、少なくとも、一九二八年内に発足したことは間違いない。

二七会は学術的な組織ではない。それゆえ、政治的に一致した主張や見解が存在していたとはいえない。しかし、本論でも論じたように、「無形の雰囲気」としての「自由」が、確かに二七会の場には存在した。それが生み出されたのは、各会員の思想や性格に起因するところが大きい。本稿では、この点について検討することができなかったことから、稿を改めて論じることにした。

資料 二七会活動状況（一九二八—一九四四年）

*「場所」「出席者（参加者）」は判明分のみを掲載。

年	月日	場所	出席者（参加者）	備考
一九二八年	一〇月二七日	芳蘭亭	吉野作造 稲原勝治 石川六郎	
	十一月二七日		吉野作造 近江秋江 江木翼	
	この年秋、二七会発足を記念して日光に旅行。馬場恒吾、長谷川如是閑、雨宮庸蔵、杉山平助らが参加。			
一九二九年	二月二七日		吉野作造 長谷川如是閑 水野広徳 稲原勝治 島中雄作 千葉亀雄 馬場 恒吾 鶴見祐輔 高橋亀吉 川原次吉 郎 伊藤茂雄 秦豊吉 木佐木勝 小 汀利得 雨宮庸蔵 清沢洌	
	三月二七日	芳蘭亭	吉野作造	
	四月二七日		吉野作造	
	六月二七日	芳蘭亭	吉野作造 清沢洌	清沢より、朝日新聞社を退社する旨の報告。
	七月二七日	芳蘭亭	吉野作造	
	八月二七日		吉野は欠席。開催案内の通知あり。	
	一〇月二六日	芳蘭亭	吉野作造 江木翼	二七日が日曜日のため前日に開催。
	十一月二七日		近松秋江 馬場恒吾 高橋亀吉	赤松克麿の国家社会主義が話題となる。近松 や高橋は賛成、馬場は反対。

一九三〇年	六月二十七日		吉野作造 川原次吉郎	川原の送別会。
	一月二十七日		吉野作造 森恪 秦豊吉 嶋中雄作	
一九三二年	三月二十七日		吉野は欠席。開催案内の通知あり。	
	五月二十七日	浜のや	吉野作造 稲原勝治 馬場恒吾 小汀利得 近松秋江 雨宮庸蔵	
一九三三年	六月二十七日		吉野作造 清沢洌 上司小剣 馬場恒吾 高橋亀吉 水野広徳 千葉亀雄 稲原勝治	清沢の帰朝歓迎会。
一九三三年	八月二十六日	偕楽園	芦田均 上司小剣 千葉亀雄 徳田秋声 清沢洌 稲原勝治 長谷川如是閑 柳沢健 馬場恒吾 小汀利得 水野広徳 杉山平助 嶋中雄作	
	九月二十七日	芳蘭亭	芦田均	
	一〇月二十七日	芳蘭亭	芦田均	
	十二月二十七日		芦田均	
一九三四年	五月二十六日		芦田均 松本丞治	
	六月二十三日	箱根	上司小剣 芦田均 清沢洌 細田民樹 杉山平助 嶋中雄作 佐藤観次郎 千葉亀雄 徳田秋声 近松秋江 下村千秋 川原次吉郎 長谷川如是閑 馬場恒吾 小汀利得 佐々弘雄 高橋亀吉	一泊旅行(宿泊…俵石閣)。

					一九三五年
七月二十七日	芳蘭亭	芦田均 後藤新平			
九月二十七日	芳蘭亭	芦田均			
一〇月二十七日	芳蘭亭	芦田均			
十一月二十七日	那須	近松秋江 下村千秋 細田民樹 水野 廣徳 馬場恒吾 清沢洌	一泊旅行。		
十二月二十七日		近松秋江 上司小劍 正宗白鳥 杉山 平助			
一月二十六日		芦田均			
二月二十七日		芦田均			
三月二十七日	芳蘭亭	芦田均 美濃部達吉			
四月二十七日	偕楽園	芦田均 鹿島(守之助か?)			
五月二十五日	修善寺	芦田均 長谷川如是閑 佐藤観次郎 上司小劍 細田民樹 清沢洌 下村千 秋 嶋中雄作 馬場恒吾 小汀利得 徳田秋聲 杉山平助 千葉亀雄 水野 廣徳 川原次吉郎 近松秋江	一泊旅行(宿泊…旅館新井)。芦田は二六日 午前、単独で東京に戻る。旅館新井の主人と 井上彰が同行。		
九月二十七日		芦田均	芦田による満洲視察の話。		
十一月二十七日	川原湯	徳田秋声 馬場恒吾 小汀利得 清沢 洌 上司小劍 杉山平助	敬業館宿泊。上州耶馬溪を見学。		

一九三七年	一月二七日	芳蘭亭	芦田均		
	二月二七日	偕楽園	近松秋江 徳田秋声 正宗白鳥 上司 小剣 水野広徳 馬場恒吾 清沢洌 伊藤正徳 小汀利得	「二・二六事件」が話題となる。	
	四月二七日	偕楽園	芦田均		
	五月二三日	伊豆今井浜	近松秋江 稲原勝治 馬場恒吾 水野 広徳 近松秋江 清沢洌	一泊旅行。	
	六月二七日	偕楽園	芦田均		
	七月二七日		芦田均		
	一二月二六日	偕楽園			「十日会」と二七会の合同忘年会開催。
	この年秋に草津、軽井沢へ旅行。馬場恒吾、上司小剣、長谷川如是閑				
	一九三七年	一月二七日		芦田均	
	二月二七日	偕楽園	芦田均	長谷川如是閑	
三月二七日		芦田均			
五月二七日		芦田均	馬場恒吾		
七月二七日		芦田均			
九月二二日	白水	芦田均	清沢洌	清沢の送別会。	
この年春頃に日光湯元へ旅行。馬場恒吾、清沢洌、長谷川如是閑らが参加。					

一九三八年	四月二十七日		芦田均		嶋中より近松への援助依頼。翌日、会員が中央公論社に集合し、見舞金を贈る件について具体的な相談。近松も招かれる。
	七月二十七日		嶋中雄作 徳田秋声		
	十一月二十八日		上司小剣 下村千秋 水野広徳 阿部真之助 清沢洌 谷川徹三 徳田秋声 芦田均 馬場恒吾		
	十二月二十七日		芦田均		
一九三九年	一月二十七日	芳蘭亭	芦田均 松岡洋右		
	二月二十七日	偕楽園	芦田均 阿部真之助 正宗白鳥		芦田の日記では、「Miss. Baba」の出席を確認できぬ。
	三月二十七日	白水	芦田均		
	四月二十七日	偕楽園	芦田均 阿部真之助 鈴木文史郎		
	六月二十七日		徳田秋声		
	十二月二十七日		芦田均		
一九四〇年	一月二十七日	偕楽園	芦田均 馬場恒吾 清沢洌 徳田秋声		「浅間丸」事件が話題となる。
	二月二十七日		芦田均 徳田秋声		

一九四二年	三月二十七日	熱海	徳田秋声 正宗白鳥 伊藤正徳 川原次吉郎 長谷川如是閑 清沢洌 水野広徳 馬場恒吾 細田民樹 下村千秋 上司小剣 阿部真之助 杉山平助	一泊旅行(宿泊・山王ホテル)。
	五月二十七日		芦田均	
	七月二十七日	偕楽園	芦田均 馬場恒吾	馬場による「新体制」に関する報告。
	九月二十七日		芦田均 馬場恒吾 徳田秋声	
	十二月二十七日		芦田均 小汀利得 馬場恒吾	
一九四一年	一月二十七日		芦田均 杉山平助 清沢洌	日米関係が話題となる。
	二月二十七日		芦田均	(日本、日米関係の) 将来について語る。
	七月二十八日		芦田均	第二次近衛内閣総辞職(松岡洋右外相の更迭)が話題となる。
	十一月二十七日	偕楽園	芦田均 徳田秋声	日米交渉、ゾルゲ事件が話題となる。
	十二月二十七日	偕楽園	正宗白鳥 馬場恒吾	対米戦争が話題となる。
一九四二年	十一月二十七日	偕楽園	芦田均 嶋中雄作 馬場恒吾 清沢洌 小汀利得 稲原勝治 正宗白鳥 阿部真之助 上司小剣 細田民樹 下村千秋	政治状況、国際情勢が話題となる。

	二月二十八日	偕楽園	芦田均 馬場恒吾 下村千秋 細田民樹 上司小剣 阿部真之助 小汀利得 清沢冽 水野広徳 正宗白鳥 長谷川如是閑	
一九四三年	七月十七日		清沢冽 芦田均 谷川徹三 長谷川如是閑 馬場恒吾 正宗白鳥 上司小剣 嶋中雄作 阿部真之助	
一九四四年	一月二十七日	偕楽園	清沢冽 芦田均 近松秋江	徳田秋声追悼会。

〔吉野作造日記三（昭和2―7）〕、『暗黒日記』、『芦田均日記』の記録を中心に、適宜、会員の回想録等で補った。〕

- (1) 「二十七日会」と表記される場合もあるが、本稿では「二七会」の表記に統一する（引用文を除く）。
- (2) 馬場恒吾「二七会の思ひ出」、『中央公論社七十年史』（中央公論社、一九五五年、四九〇頁）。
- (3) 馬場恒吾「二七会と清澤君」、『民主新論』第一卷第三号（一九四八年八月）、五三頁。
- (4) 中央公論社は、学術組織として一九三九年五月に国民学術協会を創設した。初代理事長は桑木敏翼、常務理事は三木清、清沢冽、嶋中雄作が務めた。国民学術協会については、兩宮庸蔵『思ふ草―ジャーナリスト六十年』（中央公論社、一九八八年）、国民学術協会『財団法人国民学術協会の記録―一九三九年―一九九九年』（国民学術協会、一九九九年）、を参照された。
- (5) 一九三七年頃に、小林二三の意志を汲んだ三宅晴暉が人を集めたことされる。原則、毎月二十六日に開催された。二六会については、三宅晴暉「小林二三翁の想い出」（『小林二三翁の追想』一九六一年）、室伏高信『戦争私書（中公文庫、一九九〇年、初版は一九六八年に全貌社から出版）を参照された。なお、小林は、「大臣落第記」（『中央公論』一九四一年五月号）の中で、二六会について言及している。この中で会員の氏名が「MU」「SA」と表記されているが、これは名字の頭文字と推測される。つまり、「MU」は室伏の「む」である。同じように、「SA」は佐々木茂索、「KU」は郷枝完二、「MI」は三宅である。
- (6) 室伏、前掲書、一〇九―一一〇頁。

二七会とその人々

(7) 二七会と会員が重複する二六会が設けられた理由について、御厨貫は、「おそらく一般の社会生活の上で、自由な言論の保障がなくなればなくなるほど、人はみなそこだけは自由なものが言える」という意味でのオアシスを欲したからであろう」と指摘している(御厨貫『馬場恒吾の面目―危機の時代のリベラリスト』(中公文庫、二〇一三年、初版は一九九七年に中央公論社から出版)、一八四頁)。

(8) 御厨、前掲書、山本義彦『清沢洌の政治経済思想―近代日本の自由主義と国際平和』(御茶の水書房、一九九六年)、北岡伸一『清沢洌―外交評論の運命(増補版)』(中公新書、二〇〇四年)、佐久間俊明『清沢洌の自由主義思想』(日本経済評論社、二〇一五年)。

(9) 二七会に関する回想としては、正宗白鳥『文壇五十年』(中公文庫、二〇一三年、初版は一九五四年に河出書房から出版)がある。

(10) 第一に、『吉野作造日記』(日記三『昭和2-7』)(『吉野作造選集15』山岩波書店、一九九六年)所収である。初期の二七会の模様を窺い知ることができる。第二に、『芦田均日記』(全五巻)(柏書房、二〇一二年)である。ここには、戦前から戦中にかけての日記が収録されている。彼は二七会の出席率が非常に高いため、開催状況を把握する上で非常に有益である。

(11) 正宗、前掲書、一〇二頁。彼は、『嶋中君追悼』(前掲『中央公論社七十年史』所収)でも同趣旨のことを述べている。

(12) 松田義男編『清沢洌著作目録』(二〇〇二年八月二十日、二〇一六年一月三十日改訂)、一五六頁。同目録は、松田のホームページ (<http://ymatsuda.pro.jok2.com/>) 最終確認日:二〇一六年三月三十一日) に掲載されている。

(13) 馬場は最初原稿料を受け取った時としているが、両宮は数回分の原稿料を受け取った時としており、食い違いが生じている。

(14) 借楽園は、一八八三年に日本橋茅場町に開店した中華料理店である(樋田満文編『東京文学地名辞典』(東京堂出版、一九七八年)、八三頁、小菅桂子『近代日本食文化年表』(雄山閣、一九九七年)、四三頁)。借楽園の料理は、素材へのこだわりはもちろん、日本人の口に合う味付けが工夫されていた。さらに、「座敷が綺麗で、床の間には古絵の一軸をかけ、白磁の壺には、四季折々の花を活け、殊に仕器の美しい」(後藤末雄『天下第一の幸福人』、谷崎潤一郎編『撫山翁しのぶ草』(一九六三年、私家版)、一八八頁) ことも、多くの人々に好まれた理由だった。大広間には、呉昌碩が揮毫した「借楽園」の額が飾られていた(同前、一八五頁)。園主の笹沼源之助は、谷崎潤一郎の幼少からの友人である。笹沼の死後、谷崎が編集した前掲書には、当時の借楽園の雰囲気伝える文章が収められている。ちなみに、芦田によると、一九三三年八月二十六日に開催された月例懇談会は、磯子の借楽園で開催された(下河辺元春・福永文夫編『芦田均日記 第三巻』(柏書房、二〇一二年) 六〇五頁)。これは、軍人も頻繁に利用していた高級料亭である。

(15) 馬場、前掲『二七会の思ひ出』、四八九頁。

(16) 同前。

- (17) 北岡、前掲書、七八―七九頁。
- (18) 雨宮、前掲書、三六七頁。
- (19) 清沢洌(橋川文三編集・解説)『暗黒日記I』(評論社、一九七〇年)、二五八頁。
- (20) 北岡、前掲書、七三頁。なお、『中央公論新社の二〇〇年』(中央公論新社、二〇〇一年)は、この北岡の指摘に触れているが、発足の日付については確定していない(同書、一一四頁)。
- (21) 吉野、前掲「日記三(昭和2―7)」、九二頁。
- (22) 同前、九四頁。
- (23) 雨宮、前掲書、三二〇頁。
- (24) 「二七会雨宮康威宛書簡(一九二九(昭和四)年三月二日)」、山梨県立文学館所蔵。
- (25) 木佐木の名も見えるが、彼の『木佐木日記』には、二七会に関する記述が見当たらない。ちなみに、伊藤茂雄は婦人公論編集長、秦豊吉は翻訳家である。
- (26) 松尾尊発編『吉野作造年譜』、『吉野作造集 別巻』(岩波書店、一九九七年)、一〇二頁。
- (27) 正宗は、一九二八年十一月から翌年十月まで外遊に出掛けている。帰国後の一九三〇年に会員となった(『年譜』、『正宗白鳥全集 第三十巻』(福武書店、一九八六年)、五六四頁)。
- (28) 正宗、前掲書、一〇二頁。
- (29) 清沢は、阿部宛書簡(一九三五年十月二十五日付)の中で、二七会への出席を依頼している(川村湊・守屋貫嗣『文壇落葉集(毎日新聞社、二〇〇五年)、二二四頁)。そして、上司の阿部宛書簡(一九三六年七月七日付)では、「両三度二七会でお顔を見ました」(同前、九五頁)と記されているので、少なくとも、一九三六年四月までに会に加わったと考えられる。
- (30) 旧社員有志一同編『嶋中雄作略年譜』(一九七一年一月、私家版)、二二頁。
- (31) 雨宮は、会員の中に江木、高橋、新居を含めている(雨宮、前掲書、一〇、一三八、四五―五二頁)。佐々の名は見られないが、正宗によれば、月例懇談会に出席し(『正宗、前掲書、一〇二頁)、また、上司小剣(創作・旅行・集会・著書機、『読売新聞』一九三四年七月十二日付)や近松秋江(随筆 銀座で会ふ人々【上】、『読売新聞』一九三四年十一月二十一日付)によると、一泊旅行にも参加していた。
- (32) 雨宮は、江木が会員であった理由について、「彼がリベラリストであり、重慶の存在を苦々しく思っていた点で吉野とも共通であった関係にもよる」

- (32) (雨宮、前掲書、二三九頁)と説明している。
- (33) 一九二九年八月に三木が『中央公論』執筆者有志の会「二七会」の会員となった(『年譜』、『三木清全集 第十九卷』(岩波書店、一九六八年)、六八八頁)と記載されている。
- (34) 三木清「中央公論社に対する私見」(『都新聞』一九三三年十一月十五・十六日付、同前、六二〇頁)。
- (35) 蠟山は、戦後、中央公論の主幹として加わった。彼は嶋中と知り合った時期について、昭和十年頃にゴルフの集まり(P.G.A.)で一緒になったと述懐している(蠟山政道「終戦前後のこと」、旧社員有志一同編『嶋中雄作社長の思い出』(私家版、一九七一年一月、二二頁)。
- (36) 『石橋湛山年譜』、『石橋湛山全集 第十五卷』(東洋経済新報社、一九七二年)、三六七頁。
- (37) 上田美和『石橋湛山論 言論と行動』(吉川弘文館、二〇一二年、一七八頁)。
- (38) 『年表・中央公論社の八十年』、中央公論社編・杉森久英執筆『中央公論社の八十年』(中央公論社、一九六五年)、三九九頁。
- (39) 山本、前掲書、一八〇頁。
- (40) 石橋について言及しているのは、谷川徹三の「敗戦前後」(『読売新聞』一九七九年一月四日〜二十七日付(連載))が唯一である。この中で谷川は、「私は昭和十五年ベンクラフの例会で、上海での見聞の報告をして清沢さんに喜ばれたあと、多分清沢さんの推薦によるものであろう、そのメンバーになった」と二七会に加わる経緯に触れた上で、「石橋湛山や杉山平助も私が出席するようになってから時どき顔を見せた」と述べている(谷川徹三「敗戦前後」、『自伝抄』(中央公論社、一九八九年)、一一八頁)。だが、この記述では、谷川が石橋と顔を合わせたのが、戦後なのか、それともそれ以前なのか判断できない。杉山について補足すると、彼は一九三〇年代前半より、月例懇談会、一泊旅行に参加していた。
- (41) 三宅晴暉『石橋湛山論』(『中央公論』一九五七年二月号、『三宅晴暉の足跡』(一九六八年、私家版)、二二五頁)。
- (42) 『三宅晴暉略年譜』(同書収録)参照。
- (43) 芦田均・石橋湛山・伊藤正徳・小汀利得・三宅晴暉「オールド・リベラリスト放談」(『中央公論』一九五五年十一月号)の中でも、二七会が少し話題となっているが、石橋は発言していない。
- (44) 同日記は現存する二冊の日記帳に基づいて、一九四五年一月一日から一九五七年一月三日までを収録している。ただ一九四九年分は日記帳が欠落しており収録されていない(増田弘「解説」、石橋湛一・伊藤隆編『石橋湛山日記 下』(みすず書房、二〇〇一年)、八五〇頁)。
- (45) 石橋湛一・伊藤隆編『石橋湛山日記 上』(みすず書房、二〇〇一年、一七五頁)。
- (46) 「付 手帳日記昭和二二(一九四七)年」、『芦田均日記 第一卷』(岩波書店、一九八六年、三〇五頁)。

- (47) 石橋・伊藤編、前掲『石橋湛山日記 上』（みすず書房、二〇〇二年）、一九四頁。
- (48) 同前、二八二頁。
- (49) 前掲『石橋湛山年譜』、四〇二頁。
- (50) 同前、四〇三頁。
- (51) 石橋・伊藤編、前掲『石橋湛山日記 上』、三二六頁。
- (52) 同前、三七二頁。
- (53) 石橋・伊藤編、前掲『石橋湛山日記 下』、五五三頁。
- (54) 同前、七一頁。
- (55) 二十七日が日曜の場合は、前日の土曜日に繰り上げて開催された（吉野、前掲「日記三（昭和2-7）」（一九二九年十月二十六日）、一六一頁。
- (56) 両店では、料理人が日本人であるため、「半以上日本化した風味があつて、それが反つて口腹に美味い感じを与へた」ようである（松崎天民『京阪食へある記』（誠文堂、一九三〇年）、南博編集代表『近代庶民生活誌 第六卷』（三一書房、一九八七年）、一七四頁）。
- (57) 田中静一「日本化した中国の食と料理」、石毛直道監修・熊倉功夫責任編集『講座食の文化 第二卷 日本の食事文化』（農山漁村文化協会、一九九九年）、一三四頁。
- (58) 前掲「二七会兩宮庸威宛書簡（一九二九（昭和四）年三月二日）」（山梨県立文学館所蔵）参照。
- (59) 前掲、阿部宛清沢書簡、一二四頁。
- (60) 馬場、前掲「二七会の思い出」、兩宮、前掲書、四五一頁。
- (61) 正宗、前掲書、一〇二頁。
- (62) 前掲『中央公論新社二二〇年史』、一一四頁。
- (63) 所蔵されている返信葉書は、一九三八年十一月に集中している。
- 正宗白鳥書簡（一九三八年十月十四日（消印）、芦田均書簡（一九三八年十一月二十一日（消印）、小汀利得書簡（一九三八年十一月二十二日（消印）、清沢洌書簡（一九三八年十一月二十二日（消印）、鈴木文四郎書簡（一九三八年十一月二十二日（消印）、谷川徹三書簡（一九三八年十一月二十二日（消印）、徳田秋声書簡（一九三八年十一月二十二日（消印）、馬場恒吾書簡（一九三八年十一月二十三日（消印）、阿部眞之助書簡（一九三八年十一月二十四日（消印）、水野廣徳書簡（一九三八年十一月二十五日（消印）、上司小剣書簡（一九三八年十一月二十六日（消印）、下村

千秋書簡（一九三八年十一月二十六日）。

なぜこの時期の返信葉書のみが所蔵されているのか理由は不明である。恐らく、兩宮宛の他の書簡と共にこれらの葉書も奇贈されたと考えられるが、そもそも、疑問なのは、この年に起こった「生きている兵隊」事件により、兩宮は同年三月一日に中央公論社編集長を辞任休職の後、三十日に退社しているため、彼が二七会の世話人を続けていたとは考えにくいことである。なお、彼は、一九三九年五月に中央公論社によって設立（一九四〇年二月二十六日に財団法人として認可）された「国民学術協会」の主事に就いている（前掲「年表・中央公論社の八十年」、四三二頁）。また、佐藤も休職処分を受けた（三月十一日、応召）。そのため、三月以降、誰が世話人を務めていたのか定かではない。

(64) 近松秋江「赤松克麿宛書簡」（年不明一月十九日付、沢豊彦『近松秋江と「昭和」』（冬至書房、二〇一五年）、六八頁）。

(65) 徳田秋声「風雨」（未発表日記）（『中央公論』一九五〇年二月号、『徳田秋声全集 別巻』（八木書店、二〇〇六年）、一九頁）。

(66) 松岡が出席した会の模様は、細田民樹「匪団地の青少年開拓民を訪ふ」（『旅ゆく心』（有光社、一九四二年）所収）を参照された。

(67) 一九三〇年六月に川原の送別会、一九三二年六月に清沢の帰朝歓迎会、一九三七年九月に清沢の送別会が開催された。

(68) 千葉亀雄「あの頃の吉野博士」、赤松克麿編『故吉野博士を語る』（中央公論社、一九三四年）、三〇―三二頁。

(69) 島中雄作「あ、吉野先生」、同前、二五三頁。

(70) 兩宮、前掲書、二五四頁。

(71) 田中惣五郎は、一九二八年十一月の二七会が、「吉野と中央公論の関係に一つの段階を画したとみられる」と評価し、その後吉野は「第三回目の後退」を見せたと指摘した（田中惣五郎「吉野作造 日本的デモクラシーの使徒」（未來社、一九五八年）、三五七―三五九頁）。

(72) 松尾編、前掲「吉野作造年譜」、一〇三頁。

(73) 兩宮、前掲書、一三八頁。

(74) 「吉野作造 兩宮康威宛書簡（一九二九（昭和四）年八月三日付）」、山梨県立文学館所蔵。同前、二四五頁にも引用されている。

(75) 同前、五三五頁。

(76) 清沢洌「逝ける吉野作造氏」、赤松編、前掲『故吉野博士を語る』、二一九頁。

(77) 近松、前掲「随筆 銀座で会ふ人々」下二、二四三頁。

(78) 正宗、前掲書、一〇一頁。

(79) 鈴木文史朗「将棋入門の弁」、文史朗文集刊行会編『文史朗文集』（大日本雄弁会講談社、一九五二年）、三三三―三三四頁。

- (80) 正宗、前掲書、一〇二頁。
- (81) 同前。
- (82) 正宗白鳥「机上の空論」(『読売新聞』一九三八年六月二十五日付(夕刊)二日一題)、『正宗白鳥全集 第二十八卷』(福武書店、一九八四年)、一九頁。
- (83) ところが、この日めくりカレンダーは、『中央公論社の八十年』に掲載されている写真にのみ写っている。これ以外の写真は、掲載時にトリミングされているため、水野の後方に掛けられているカレンダーが写っていない。
- (84) 馬場、前掲「二七会と清澤君」、五三頁。
- (85) 馬場恒吾「草津から軽井沢」(『週刊朝日』第三二卷第三号(一九三七年一月十日) 原題は「文士評論家の一群」、『回顧と希望』(読売新聞社、一九四八年)、二二六頁。
- (86) 馬場恒吾「忘れぬ友達」(一九三八年二月二十四日執筆)、同書、一四三頁。
- (87) 山領健二編「長谷川如是閑年譜」、『長谷川如是閑集 第八卷』(岩波書店、一九九〇年)、三三八―三三九頁。
- (88) 両宮、前掲書、三三〇―三三一頁。
- (89) 下河辺・福永編、前掲『芦田均日記 第三卷』、六三三頁。
- (90) 上司、前掲「創作・旅行・集会・蓄音機」。
- (91) 馬場、前掲「草津から軽井沢」、一三七頁。
- (92) 近松、前掲「随筆 銀座で会ふ人々【上】」、二四四頁。
- (93) 長谷川如是閑「現代日本の欠乏」(『読売新聞』一九三五年六月六日付「一日一題」)、『長谷川如是閑集 第四卷』(岩波書店、一九九〇年)、三七六頁。この額については、曹洞宗福地山修禪寺ホームページ内「副島種臣の寺号額」のページで紹介されている(URL: <http://shuzenji-temple.com/jiyou13.html>、最終確認日:二〇一六年三月三十一日)。
- (94) 上司小剣「修禪寺の中食」(『都新聞』一九三五年六月三・四・五日付)、『生々抄』(大東出版社、一九四一年)、二七二頁。
- (95) 同前。
- (96) 同書、二七三頁。
- (97) 馬場、前掲「忘れぬ友達」、一四二―一四三頁、馬場、前掲「二七会の思ひ出」、四九二頁。

- (98) 馬場恒吾「若山牧水の歌」(『文芸懇話会』第一巻第一号(一九三六年一月)、前掲『回顧と希望』、二二七頁。
- (99) 同書、二二七―二二八頁。
- (100) 旅行が実施された事実は、近松から小汀に宛てた書簡により裏付けられる(近松秋江「小汀利得宛書簡」(一九三三年五月二十八日付(消印)、『近松秋江全集 第十三巻』、八七頁)。
- (101) 馬場、前掲「草津から軽井沢」、一三七一―一三八頁。
- (102) 同前、一三八頁。
- (103) 同前、一三九頁。この旅行については、馬場恒吾『百伝点描』(中公文庫、二〇〇五年、改版)、七九頁にも登場する。
- (104) 馬場恒吾「奥日光」(『読売新聞』一九三八年五月二十日付(夕刊)、原題「青葉の圧迫」、前掲『回顧と希望』、一四九頁。
- (105) 徳田秋声「日記抄(昭和15年)」、『徳田秋声全集 別巻』(八木書店、二〇〇六年)、六一頁。
- (106) 御厨、前掲書、一八四頁。
- (107) H・J・ラスキ(飯塚良明訳)『近代国家における自由』(岩波文庫、一九七四年)、七二頁。
- (108) 馬場、前掲「忘れぬ友達」、一四三頁。
- (109) 同前、一四四頁。
- (110) 同前、一四二頁。
- (111) 畑中繁雄『覚書 昭和出版弾圧小史』(図書新聞、一九七七年、第二版)、五六頁。その結果、これらの人物は、執筆の場を失っていった。特に顕著だったのが馬場である。例えば一九四〇年の時点では、『読売新聞』(『日曜評論』)、『中央公論』、『改造』、『日本評論』等に執筆していたものの、一九四一年には激減し、一九四二年以降はこれらの媒体に馬場の文章が掲載されることは一切なかった。それに対して清沢の場合は、石橋の計らいで東洋経済新報社の顧問や評議員を務めたことから、一九四五年まで『新報』に論説を發表できた。なお、これより以前には、『読売新聞』の紙面刷新の方針に伴い、一九四〇年十月より、二七会の会員が全員同紙の常連執筆者から外された(御厨、前掲書、一八五頁)。
- (112) 前掲「オールド・リベラリスト放談」、二七九頁。
- (113) 一九四四年一月二十七日付。清沢洌(橋川文三編集・解説)『暗黒日記』(評論社、一九七一年)、三三頁。菅田の日記には、「Dinner at 借楽園(二七会)。Many members came in。」(一九四四年一月二十七日付。福永文夫・下河辺元春編『菅田均日記 第四巻』(柏書房、二〇二二年)、六〇六頁)と記されている。全会員の参加だったのか確認できないが、普段よりも多くの参加者が集まったことは事実である。

- (114) 前掲「年表・中央公論社八十年」、四五二―四五三頁。
- (115) 「決戦生活へ非常措置要綱決定 勤労、防空を徹底 享楽追放、困苦に勝つ」決戦非常措置要綱、『朝日新聞』一九四四年二月二十六日付。
- (116) この措置に伴い、全国十九の劇場が休業となったり、松竹少女歌劇団は解散、宝塚歌劇団は無期限休演となった上で、女子挺身隊が結成されたりした（山中恒「暮らしの中の太平洋戦争」『岩波新書』一九八九年、一三四頁）。
- (117) 「休業興行場決まる、歌舞伎座や宝塚」、『毎日新聞』（大阪）一九四四年三月一日付。
- (118) 「享楽追放・官吏の自粛 決戦非常措置、まず4案を実施」、『朝日新聞』一九四四年二月二十九日付（夕刊）。
- (119) 「休業九八〇〇軒 帝国ホテル、精養軒など 芸妓、女給約一万八〇〇〇人は転廃／奢侈享楽面に対する非常措置実施要綱」、『朝日新聞』一九四四年三月四日付。
- (120) 芦田の日記には、次のように書き残されている。「Dinner at Hasegawa 二十六日付。The Gov published 15 articles of 戦時生活要綱。According the regulation, all 1st class restaurant and 待合 will be closed soon. This evening might be the last meeting of 廿六日付。It made me sentimental.」（前掲『芦田均日記 第四卷』、六〇〇頁。同日記には、一九四四年九月六日に食事会が開かれた旨の記載があるが、そこには「Dinner at 太平洋 with former members of 廿六会」（同前、五六四頁）と表記されている。仮に二六会が継続していれば、「former」と表現するとは考えにくいので、休止した可能性が高い。また、神奈川県との瀬で生活していた室伏は、一九四五年四月二十五日に書かれたとみられる文章の中で、「昨年の二月二十六日、最後の二六会に出席してから、まだ一度も東京に足をふみ入れたことがない」（室伏高信『江』（総合日本社、一九五三年）、一九四頁）と述べていることから、やはり、二月の月例懇談会が最後である可能性が高い。